第４節　文化的景観を形成する構成要素

計画対象範囲の景観は、第３節第５項で示した①～⑥の要素が密接に関係し合い形成されたもので、自然に作り出された地形・地質を活かしつつ、時代を経て人々が生業を営む中で築かれた景観である。特に景観の変遷を語るうえで重要なものが、井路と水田開発の歴史である。

本節では、時代別の井路と水田開発の歴史を紐解きながら、景観を形成する構成要素を整理するとともに、稲作を中心とした農業を生業とする人々の、生業を中心とした１年を通しての生活サイクルと関係付けることで、景観が人々の生業、生活の上に成り立っていることを検証する。

特に緒方盆地では、稲作と麦作の二毛作が年間を通して営まれている。４月に井路普請が行われ、５月には田への水張り、粗代掻き、植え代掻きが行われ、田は水田となり、水鏡と化す。そして６月には一斉に田植えが行われ、見事な水田景観ができあがる。夏には再び井路普請が行われ、稲穂の実りが進むにつれ、水田景観は緑から黄金色へと姿を変える。そして、秋になれば五穀豊穣を願う祭りが執り行われ、稲刈りが始まる。

稲刈りが終わった後は、麦の作付けが行われ、同時期に大地と水の恵みに感謝する祭礼でもある緒方三社川越し祭りが執り行われる。冬を越した麦は田植え前に刈り取られる。

井路普請は稲作を中心とした農業を生業とする人々にとって、井路の維持という目的を持って欠かすことのできない作業である。また、五穀豊穣を祈願する祭礼が執り行われる神社が、地区や集落、水田を見下ろす丘陵地に鎮座しているという点も景観と人々の生活、生業が結びついている１つの要因であると言える。

さらに、第３節第６項で、景観を形づくっている水田には、井路の開鑿が重要な役割を果たしていること、３つの時代区分で井路網の開鑿に併せて、景観が変遷してきたことを確認した。以下、井路と水田開発の歴史を示す（図 15～20）とともに、主な構成要素をあげる。

なお、構成要素については、「水」「石」「農業を生業とする生活形態」に着目し、水にまつわるものとして「河川」「井路」、水の恵みに感謝する祭礼に関するものとして「信仰」、石にまつわるものとして「石橋」「民俗」、農業を生業とし、人々の居住形態がわかるものとして「屋敷地」、それ以外の建造物を「その他」に区分した（表 2）。

写真 43　緒方下井路に繋がる軸丸川の井路普請（下自在）

①景観を形づくる井路群と三段階の開発

緒方川流域は、大きく 3 つの時代区分（中世以前、近世、近代）で、景観の成立過程が理解できる地域である。

近代には水田開発の技術発達（硬い岩盤の掘削、長距離隧道掘削、アーチ式石橋建築、逆サイフォン式用水路建築）により、標高の高い丘陵地が水田化されていく過程が明瞭にわかる。結果として、15 本もの井路群が、お互いを補完し合いながら緒方川流域全体を水田化している（図 13）。

また、近代にかけて丘陵地帯に開鑿された井路の末流水が、中世以前から近世に開鑿された井路への補完水として利用されている。このように広範囲にわたって、15 本もの井路群がお互いに補完し合う地域は、少なくとも大分県下では、他にはない。

井路開鑿によって築き上げられた緒方川流域では、人々が日常的に暮らし、稲作を中心とした農業を生業としながら生活を営んでいる。各地区では、年中行事として井路の維持管理（春・夏の井路普請）が大きな比重を占めており、また四季を通じた祭礼も、稲作を含む「五穀豊穣」を願うものであり、神社建物や祭りの形態にまで、井路が密接に関係している。

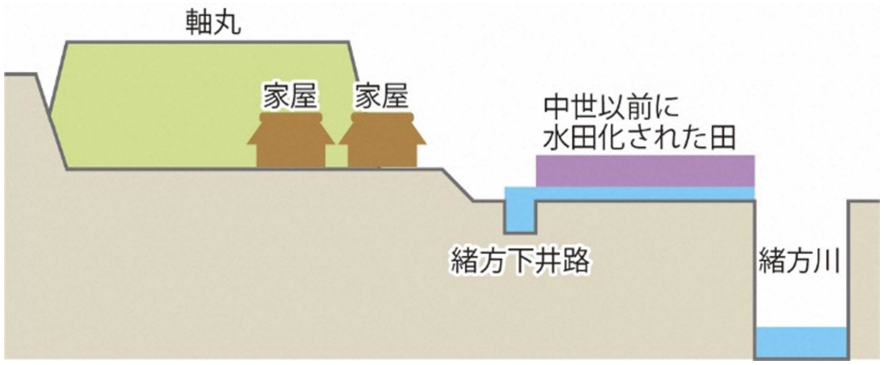
中世以前（室町時代以前）
・古くは軸丸川、大久保川（黒土甲川）より取水し、低地に開かれた井上条理を潤していた。平安末期から、緒方下井路により緒方盆地底で大規模な水田開発が行われた。緒方荘荘司（荘園を管理し、荘園内の一切の雑務を司った役人）で武将の緒方三郎惟栄による開発行為で、緒方三社（一宮・二宮・三宮八幡社）の創建、緒方宮迫東西石仏の造立なども行ったと言われている。これは、今も行われている「緒方三社川越し祭り」「緒方五千石祭」などの伝統的な祭礼の始まりに大きく影響している。緒方三社川越し祭りは、緒方井路を守る緒方三社の祭礼であり、神社創建者緒方三郎惟栄の慰霊と井路に感謝する祭礼である。
（解説） ・大久保川（黒土甲川）、軸丸川等を水源とし、緒方下井路により、盆地底部の一部が水田化されていく。 ・家屋は、緒方下井路沿いに立地する。 

図 15（1）　時代区分別の井路と水田開発の概要

近世（江戸時代）

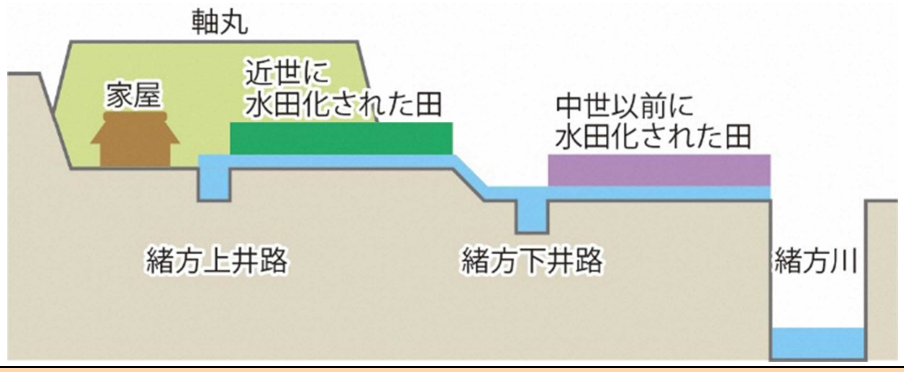
・江戸期における、長淵井路、平瀬井路、原尻古井路、野仲井路（後、三区井路）、緒方上井路の開鑿により、緒方盆地底・周辺丘陵地の水田化が進んだ。

・江戸期において、この地区を治めていた岡藩主の命のもと、井路より上手（うわて）に家屋が移された。

（解説）

・緒方上井路等により、盆地底部が広く水田化されていく。

・広い水田面積を確保するため、家屋は、緒方上井路と丘陵の間に移転する。



近代以降（明治時代以降）

・明治以降、年野井路、柚木井路・原尻新井路、富士緒井路、明正井路が通水したことにより、丘陵地帯の水田化（畑作から稲作への転換）が成し遂げられた。明治時代の字図と現況を比較したとき、畑作から稲作への劇的な転換が行われたことがわかる。

（解説）

・近代の土木技術の発達により、軸丸地区等、標高の高い丘陵地帯の水田化が進み棚田が形成される。

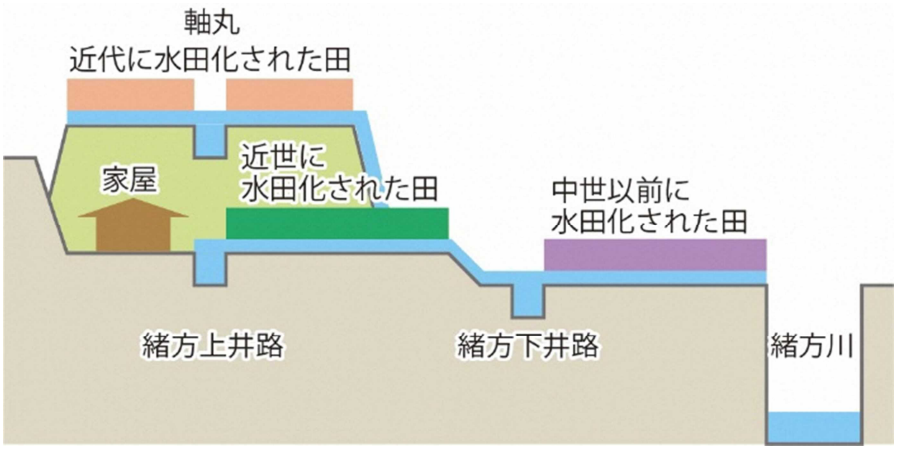


図 15（2）　時代区分別の井路と水田開発の概要

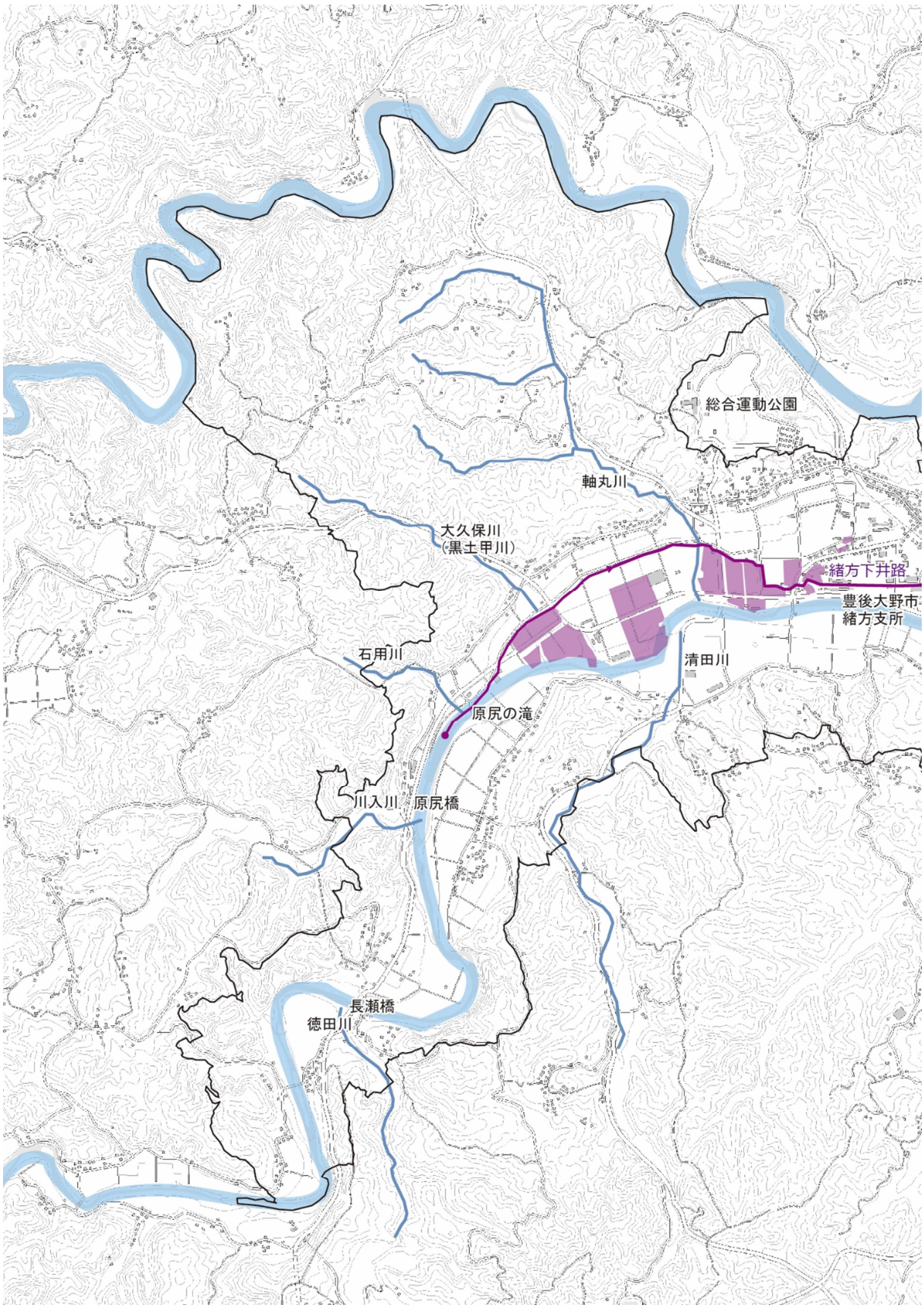


図 16(1)　中世以前の井路と圃場（紫色で着色している場所）

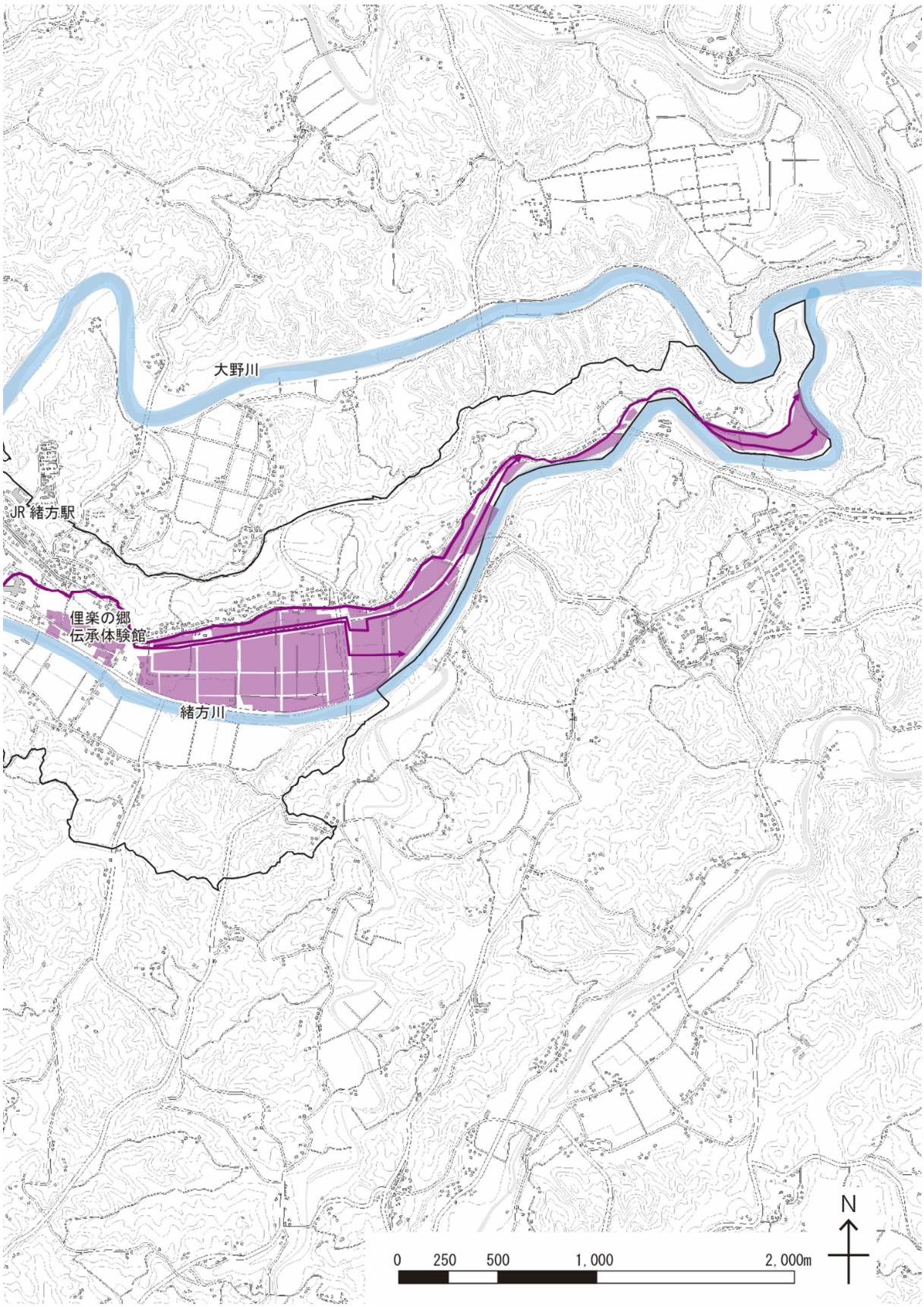


図 16(2)　中世以前の井路と圃場（紫色で着色している場所）

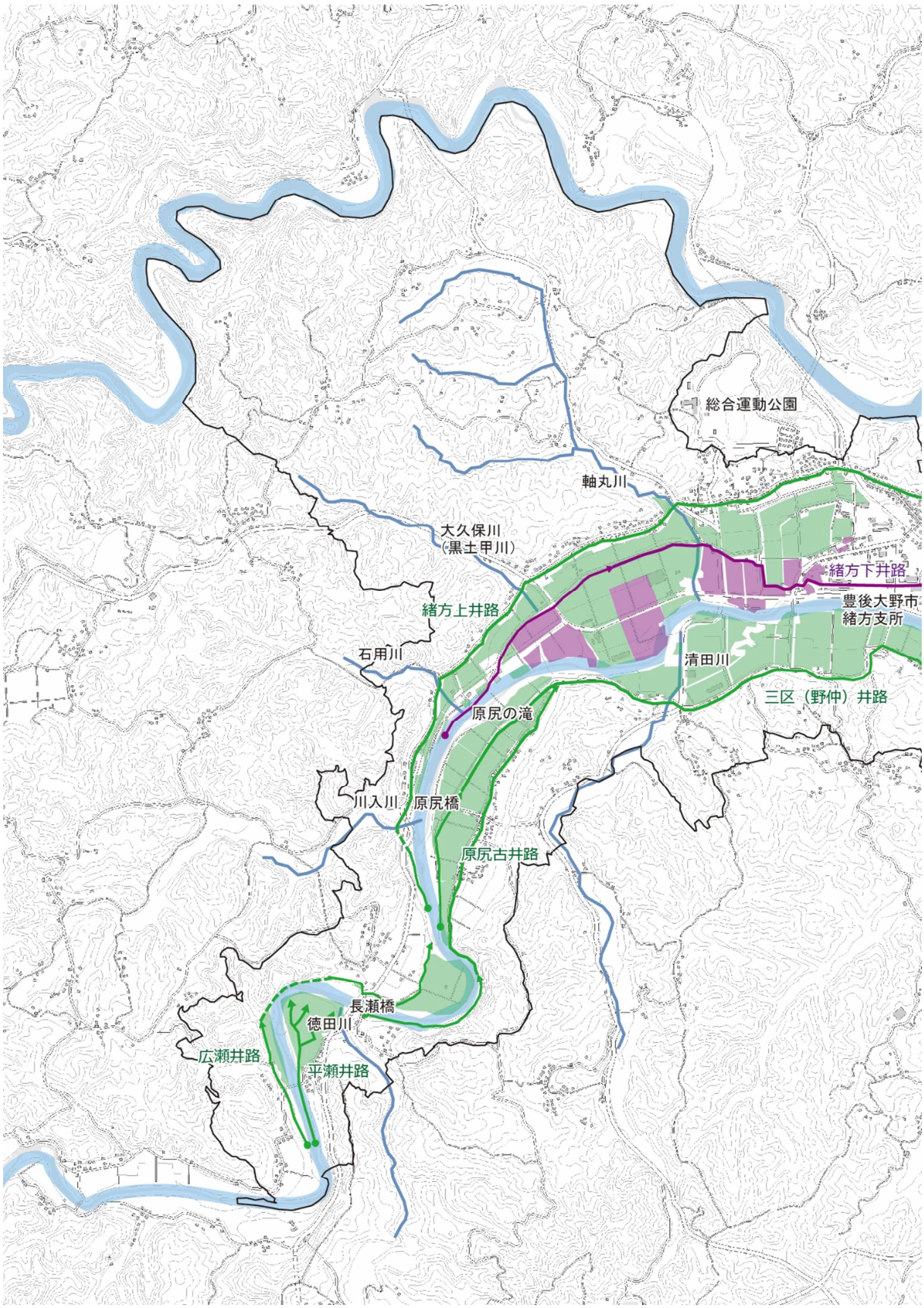


図 17(1)　近世の井路と圃場（緑色で着色している場所）

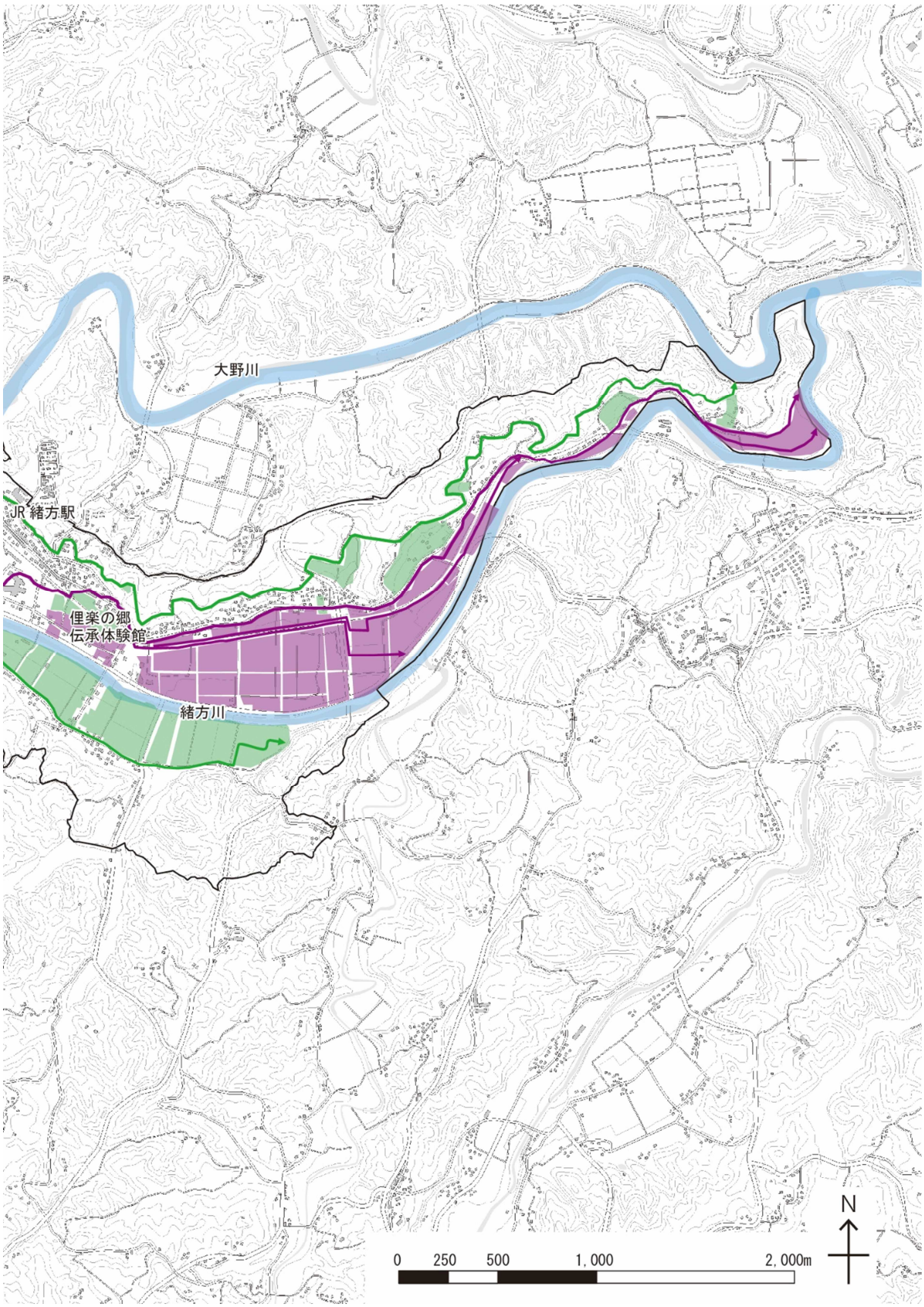


図 17(2)　近世の井路と圃場（緑色で着色している場所）

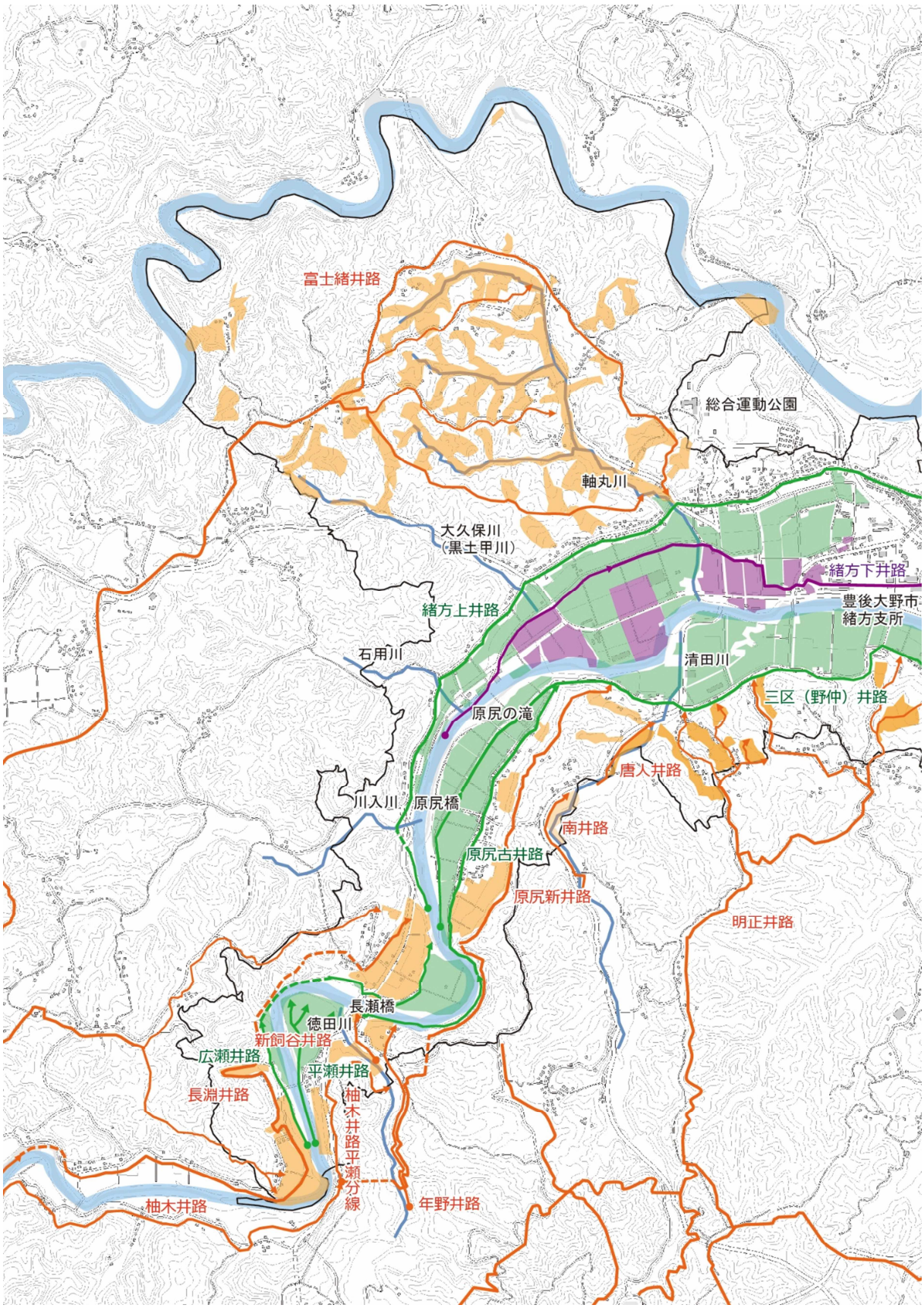


図 18(1)　近代以降の井路と圃場（橙色で着色している場所）

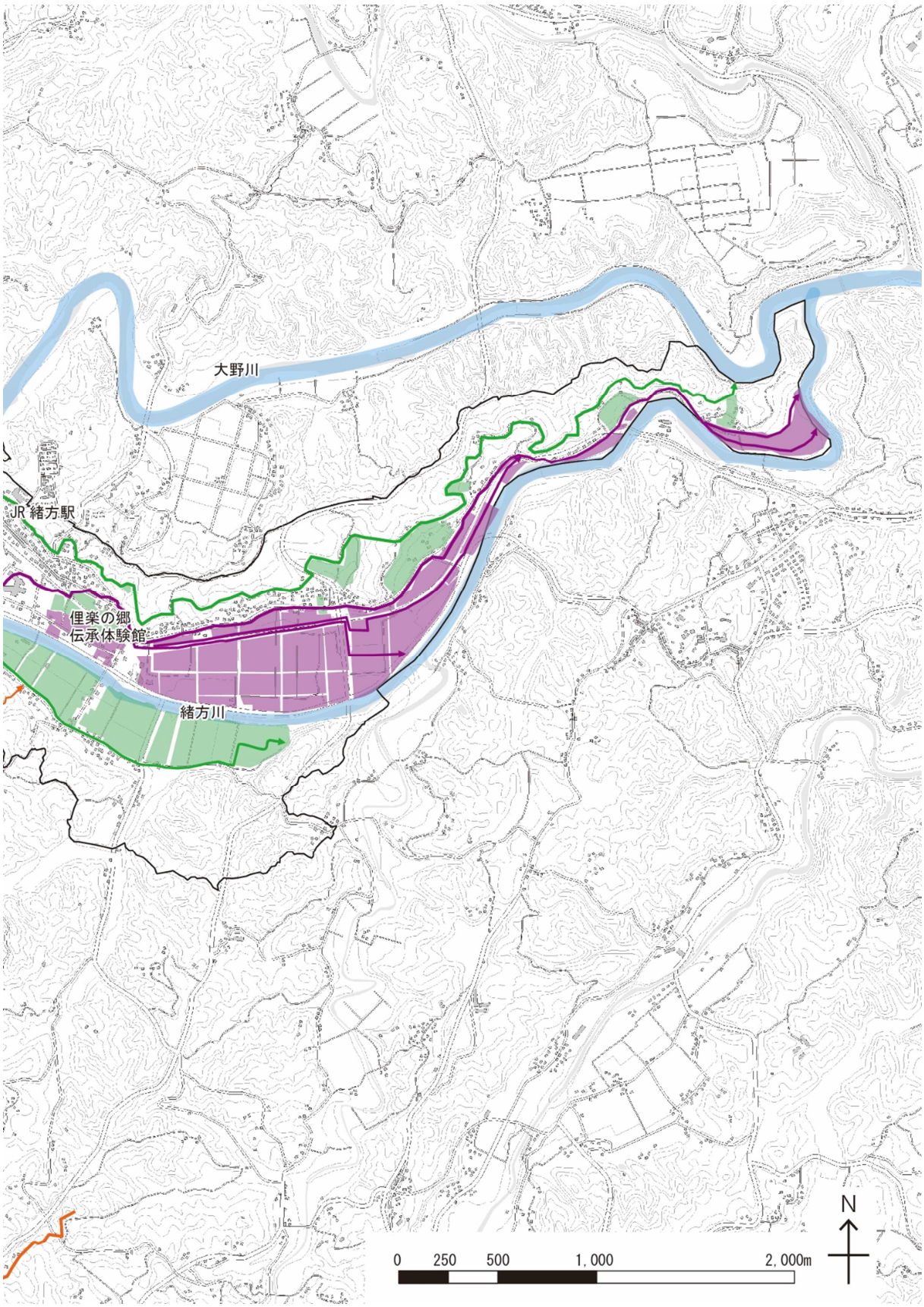


図 18(2)　近代以降の井路と圃場（橙色で着色している場所）

表 2（1）文化的景観の構成要素概要

文化的景観の成り立ち	文化的景観の価値を支える構成要素 ～自然と人間のコミュニケーションが歴史的、 文化的に検証できる景観を形づくる工作物等～		
	水にまつわるもの		大地や水の恵みに 感謝するもの
	河川	井路	信仰
古代以前の地形形成活動 ・約 9 万年前の阿蘇山の巨大噴火により堆積した火砕流は、冷えて固まって凝灰岩となり、緒方川等の水流によって侵食され、河岸段丘と巨大な滝が形成された。	・大野川 ・緒方川 ・原尻の滝 ・川入川 ・石用川 ・大久保川（黒土甲川） ・軸丸川 ・徳田川 ・清田川 ・知田川		
中世以前（室町時代以前） ・大久保川（黒土甲川）と軸丸川から引いた水が井上条里を潤した。 ・平安末期に活躍した武将の緒方三郎惟栄が、原尻の滝上流より水を引き、今の緒方下井路の礎を築いたとされている。また、緒方三社（一宮、二宮、三宮八幡社）を建立した。		・緒方下井路、水門 ・イノコ	・熊野社（大久保川（黒土甲川）及び軸丸川の水源地近くに立地） ・一宮八幡社 ・二宮八幡社、鳥居、宮田 ・三宮八幡社、三反畑板碑 ・緒方宮迫東石仏 ・緒方宮迫西石仏 ・緒方三社川越し祭り ・大日上横穴墓 ・宮園横穴墓・田尾の横穴墓 ・軸丸磨崖不動尊
近世（江戸時代） ・緒方川右岸及び左岸の水利体系の開発は、そのほとんどが 17 世紀半ばから後半にかけて、岡藩主中川氏のもとで進められた。緒方盆地は岡藩最大の穀倉地帯となり、緒方五千石の由来となった。 ・緒方上井路の完成に伴い、家屋は藩主からのお触れにより井路より上の里山沿いに形成された。		・平瀬井路 ・広瀬井路、隧道 ・原尻古井路、隧道 ・三区（野仲）井路 ・緒方上井路、水門石樋、水車、高石垣、井路集散地点 ・クンバ（汲み場）	・各地区、集落にある神社 ・緒方上井路磨崖仏 ・境内地等にある石灯籠、石幢、宝塔、宝篋印塔などの石造物
近代以降（明治時代以降） ・明治以降の土木技術の発展に伴い富士緒井路等が開鑿され、台地上に多くの棚田が形成された。 ・大正 11 年（1922）に開通した豊肥線緒方駅と周辺地域を接続し、迅速な物資運輸を行うため、巨大なアーチ式石橋が緒方川等に複数建設された。		・富士緒井路、隧道サイフォン ・明正井路 ・年野井路 ・柚木井路 ・新飼谷井路 ・長淵井路、隧道 ・原尻新井路 ・南井路 ・唐人井路 ・井路に架かる橋	

表 2（2）文化的景観の構成要素概要

文化的景観の成り立ち	文化的景観の価値を支える構成要素 ～自然と人間のコミュニケーションが歴史的、 文化的に検証できる景観を形づくる工作物等～			
	石にまつわるもの		農業を生業とし、 人々の居住形態が わかるもの	その他
	石橋	民俗	屋敷地	
古代以前の地形形成活動 ・約 9 万年前の阿蘇山の巨大噴火により堆積した火砕流は、冷えて固まって凝灰岩となり、緒方川等の水流によって侵食され、河岸段丘と巨大な滝が形成された。				
中世以前（室町時代以前） ・大久保川（黒土甲川）と軸丸川から引いた水が井上条里を潤した。 ・平安末期に活躍した武将の緒方三郎惟栄が、原尻の滝上流より水を引き、今の緒方下井路の礎を築いたとされている。また、緒方三社（一宮、二宮、三宮八幡社）を建立した。				・緒方三郎惟栄館跡 ・小牧城跡 ・高尾城跡 ・徳丸城跡
近世（江戸時代） ・緒方川右岸及び左岸の水利体系の開発は、そのほとんどが 17 世紀半ばから後半にかけて、岡藩主中川氏のもとで進められた。緒方盆地は岡藩最大の穀倉地帯となり、緒方五千石の由来となった。 ・緒方上井路の完成に伴い、家屋は藩主からのお触れにより井路より上の里山沿いに形成された。		・辻河原石風呂 ・下自在石風呂 ・中ノ原石風呂 ・上戸石風呂 ・原の石風呂 ・市穴石風呂 ・野仲石風呂		・野仲二里塚 ・久土知二里塚 ・かんじょ流し ・こだい
近代以降（明治時代以降） ・明治以降の土木技術の発展に伴い富士緒井路等が開鑿され、台地上に多くの棚田が形成された。 ・大正 11 年（1922）に開通した豊肥線緒方駅と周辺地域を接続し、迅速な物資運輸を行うため、巨大なアーチ式石橋が緒方川等に複数建設された。	・長瀬橋 ・原尻橋 ・緒方橋 ・鳴瀧橋 ・上年野橋 ・野仲橋 ・川久保橋 ・大正橋		・農家住宅 ・造り酒屋 ・まちの鍛冶や ・オトシゴンヤ ・敷地境等を示す石垣	・旧緒方村役場庁舎 ・緒方五千石祭 ・絹さん人形

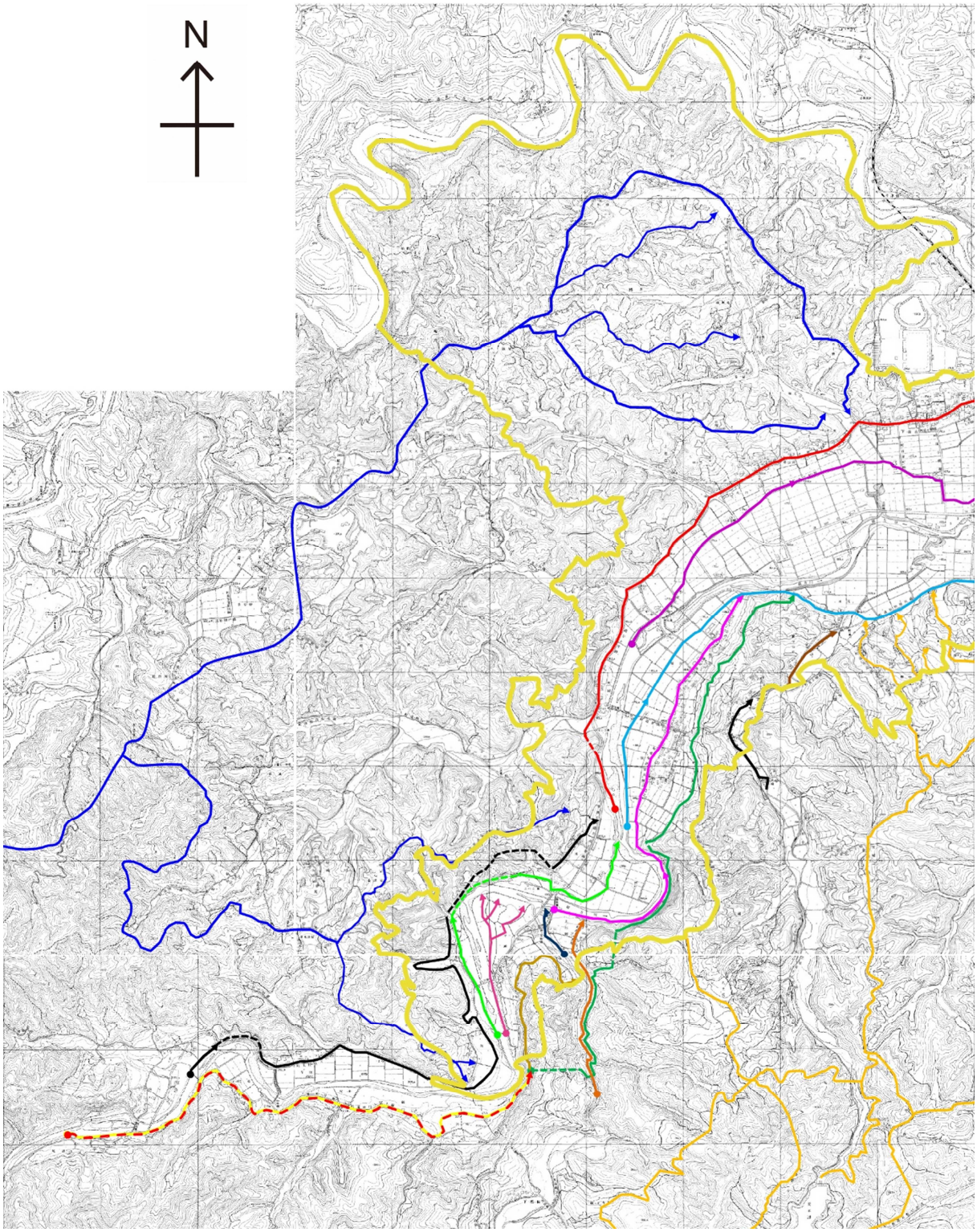


図 19(1)　緒方盆地・軸丸棚田地域を潤す井路群

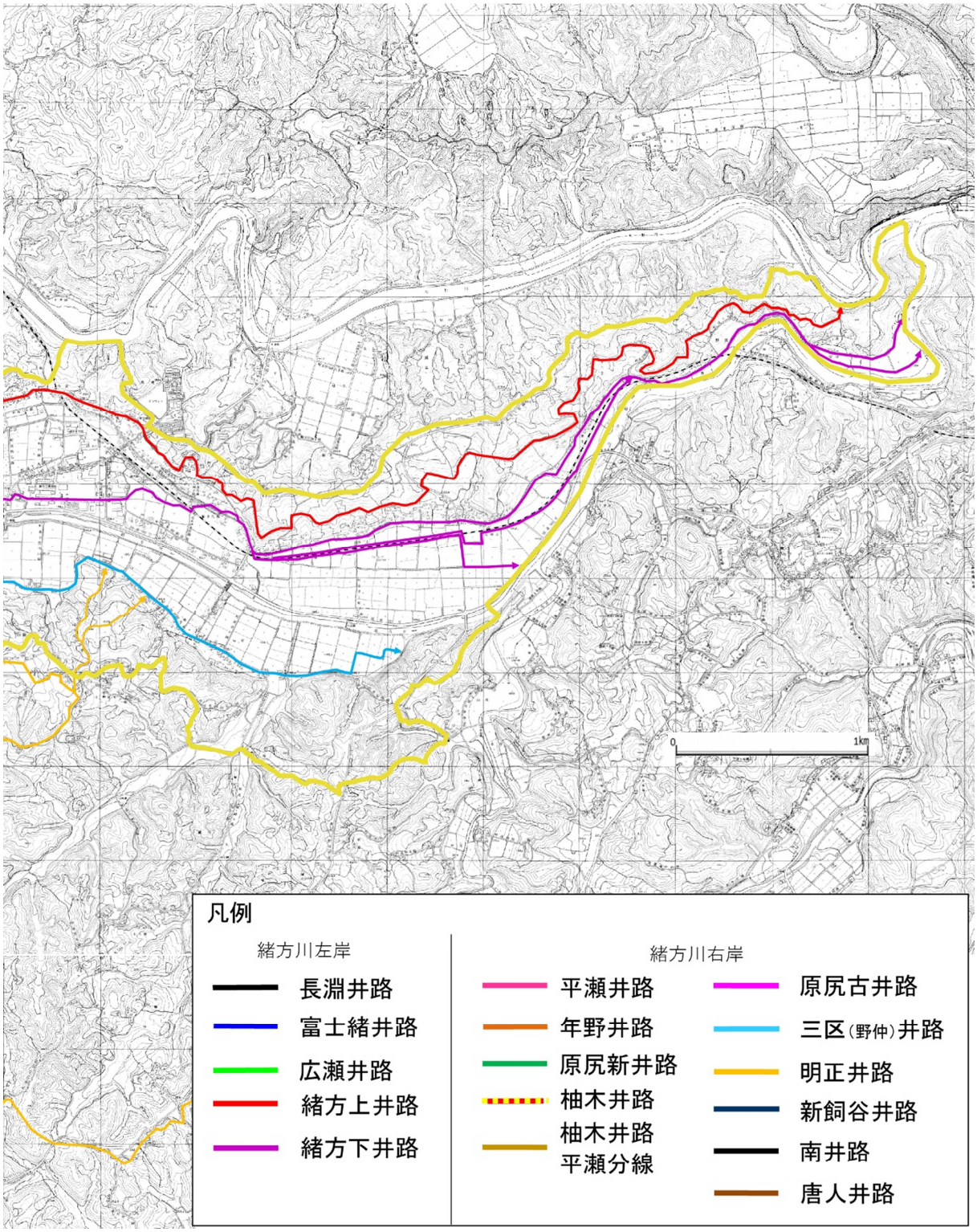


図 19(2)　緒方盆地・軸丸棚田地域を潤す井路群

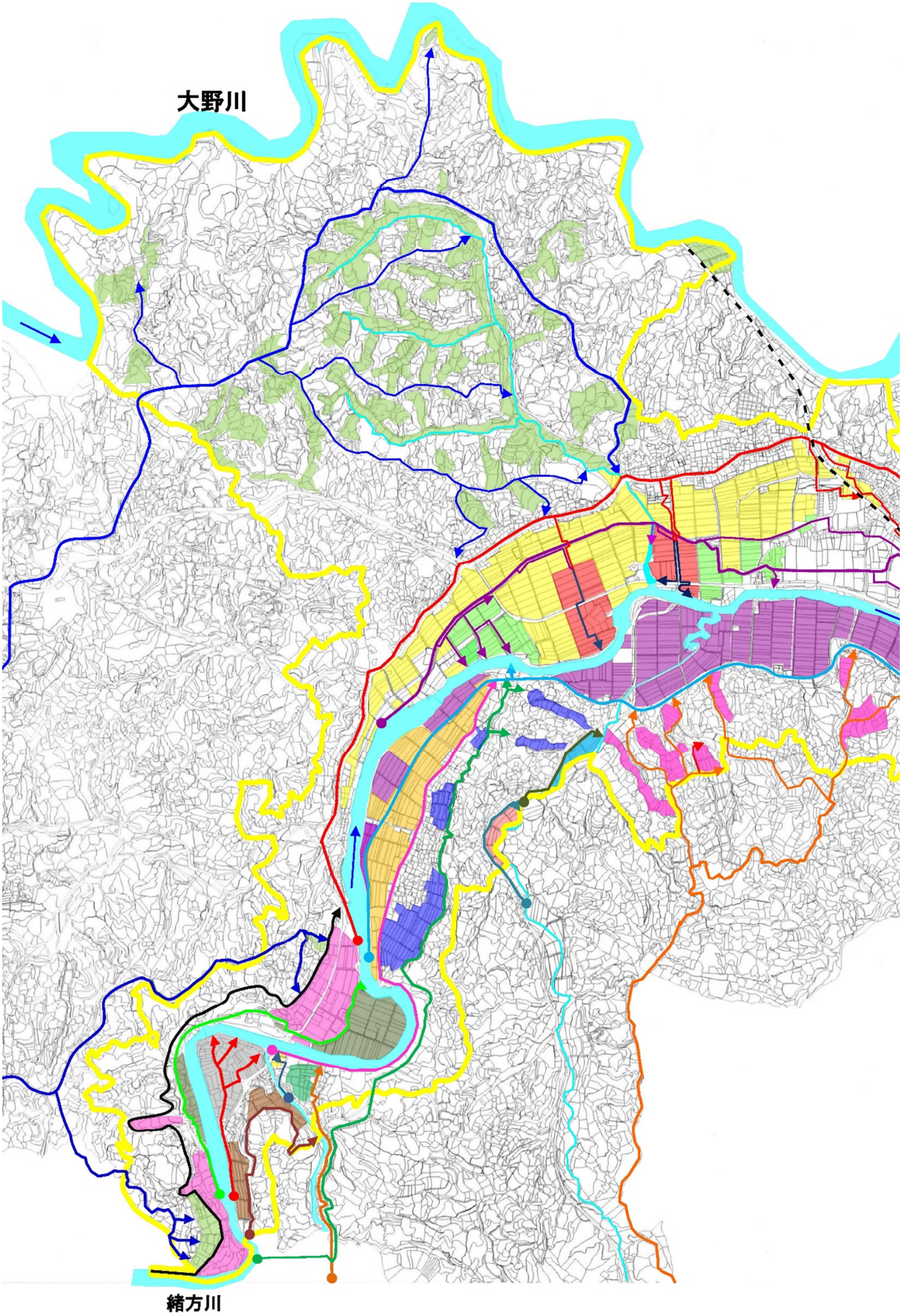


図 20(1)　緒方盆地・軸丸棚田地域を潤す井路群・井路網と灌漑圃場の塗り分け

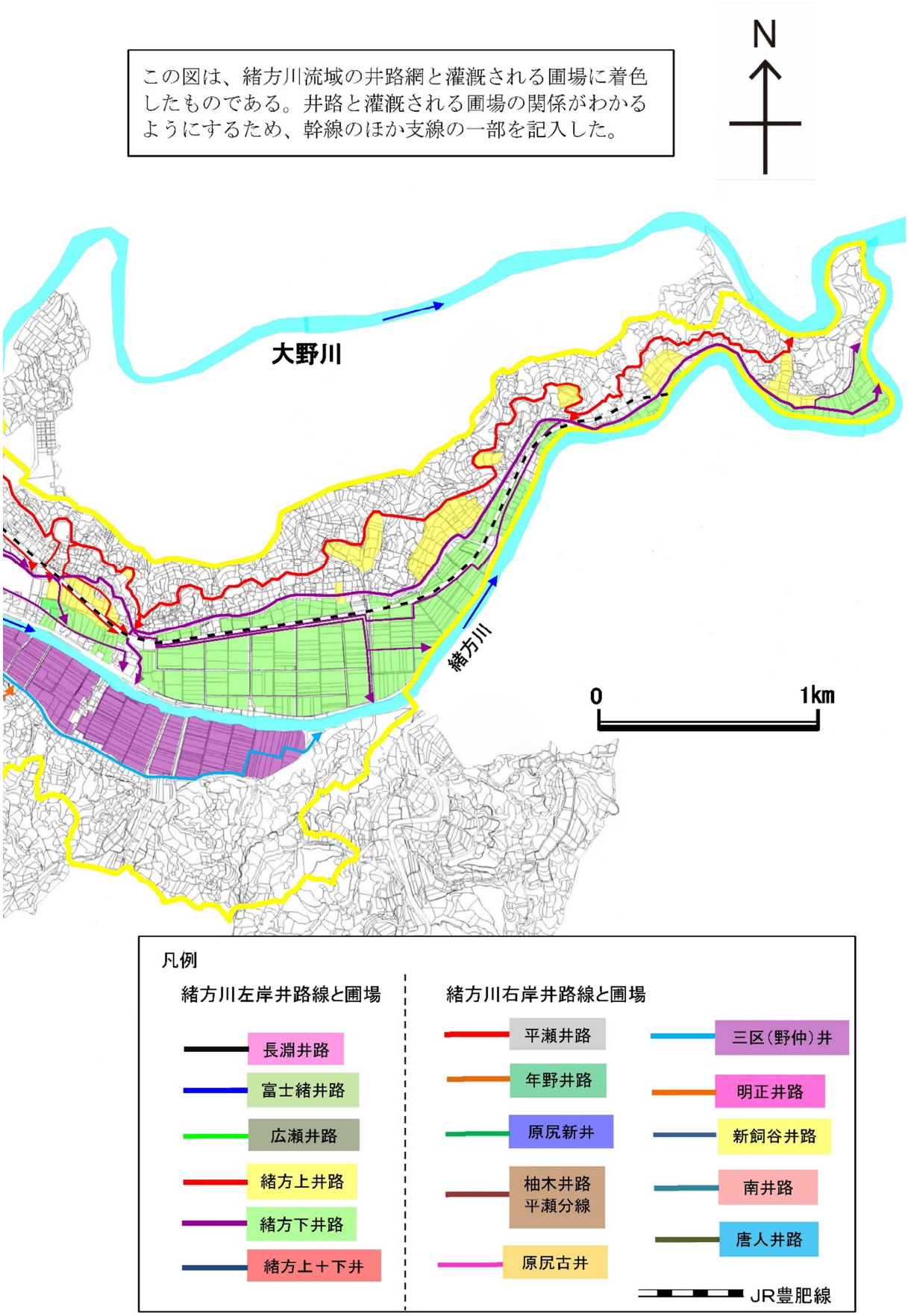


図 18(2)　緒方盆地・軸丸棚田地域を潤す井路群・井路網と灌漑圃場の塗り分け

第５節　計画対象範囲における課題と方向性

①地域の持続性に関わる課題

当地域においては、本計画の冒頭で水田風景などを代表的な景観として紹介した。

「水と石が織りなす農村景観」が、自然の地形・地質を利用して、長い歴史の人々の営みのなかで形成されたものであることはこれまでに述べてきたとおりである。

しかしながら、平成 17 年（2005）3 月末の町村合併により、当地域は緒方町の中心地域であったものが周辺地域と化し、市中心部、あるいは大分市といった市外への生産年齢人口（15～64 歳）流出が顕著となった。平成 25 年（2013）に高齢化率（65 歳以上が占める割合）が 50%を超えているのは、当地域内にある 16 地区のうち 5 地区であったのが、令和 3 年（2021）3 月末の人口を見てみると、13 地区に増えている。中でも、当地域の美しい農村景観を支える生業としての農業は、人口減少、少子高齢化、産業構造の変化等を要因とし、農業従事者等の深刻な担い手不足に直面している。

その結果、田畑の休耕田化、耕作放棄地や荒廃地の増加、井路普請や道普請の困難化が重層的に発生し、当地域の美しい農村景観が損なわれていく可能性が高まってきている。

同時に、山林の維持管理においても人の手がおよびにくくなり、農村景観の後背地である山林の荒廃化の進行の危険性も高まってきている。

また、これら田畑や山林の荒廃化は、イノシシ等が里山まで降りてきやすくする環境形成につながり、田畑で餌等を求めることによる畦畔破壊等、二次的な農村景観の棄損を招いている。

このような、担い手不足、井路や道の維持管理の困難化、田畑や山林の荒廃化、鳥獣害等、美しい農村景観に関わる負の連鎖に歯止めをかけ、持続可能な地域環境を形成し、美しい農村景観の維持継承に努める必要がある。

②文化的景観の構成要素に関わる課題

計画対象範囲内にある河川、井路、石橋、一宮、二宮、三宮八幡社などの神社等は、当地域の農村景観における文化的景観の本質的価値を語る上で欠くべからざる構成要素であり、景観の一部となっている。

これらの景観の一部となっている構成要素が、日々の生活、生業の中で築かれたものであり、身近にありすぎることから、その価値を見過ごしがちである。実際に市民の意識の中では、「何もない」場所という認識が強かったが、日本ジオパークや世界ユネスコエコパークの認定を受けるなど、外部から評価されることがその価値を認識するきっかけとなっている。

そのため、文化的景観やその重要な構成要素の価値についての理解促進を働きかけていくと同時に、文化的景観やその構成要素を保存することに対する協力を求めていく必要がある。そして、景観を維持していくために必要な補修、改修等の財政的な支援を講じていく必要がある。

また、これまでもジオパークやエコパークの活動を通じて、地質や自然環境を後世に残していく取組を行ってきている。計画対象範囲内においても、人々の生活、生業が行われてきた過程にあっても、残されてきている自然環境を今後も継続して、構成要素の一つとして保全していく必要がある。

③文化的景観に関わる地域の主体の課題

計画対象範囲内にある緒方小学校及び緒方中学校では、市及び市教育委員会が推進する「ふるさとを誇りに思える児童・生徒の育成」の一環で、ジオパークの学習等、「郷土学」を行っている。また、ジオパークやジオパーク内にあるジオサイトを市民や市外から来る観光客を相手に紹介、説明するガイドの養成講座を毎年開催している。

文化的景観においても、その価値や内容に関して理解を促す機会を学習プログラム等に組み込み、地域の将来を担う子どもたちに文化的景観の価値を伝え、地域愛や地域への誇り醸成に努める必要がある。さらには、市民自ら対外的に本景観の価値を語ることができるよう既存のガイド養成講座等の活用を検討する。

また、文化的景観を活用し、地域の魅力向上に努め、関係人口や交流人口を増やし、井路普請や道普請、身近な美化活動等に関わる新たな担い手確保に努めるとともに、関係人口や交流人口を定住人口につなげ、新たな農業従事者等の確保に努めていく必要がある。

関係人口や交流人口を増やす最初の取組としては、視点場（ビューポイント）の整備や計画対象範囲を示す看板、構成要素を説明する案内板や説明板などの視覚的な配慮が求められる。特に、計画対象範囲の玄関口となる JR 緒方駅並びにその周辺の市街地区域においては、文化的景観の導入部としての活用が求められる。増加した空き店舗の利活用を含め、昔の農村風景や農家の様子を今なお伝える貴重な資料となっている「絹さん人形」の活用などを取り組んでいかなければならない。

④文化的景観の保存・活用計画の必要性

上記のような、文化的景観の維持継承に関わる複合的な課題解消に向けては、文化的景観の保存や活用に関わる基本方針を整理し、当地域に関わる多様な主体の役割等を整理する必要がある。

そして、多様な主体が連携しながら、基本方針の実施に向けた文化的景観の保存・活用計画を作成する必要がある。

さらには、文化的景観の保存・活用計画を関係主体と共有し、実践していくことが必要である。

本計画の実践については、担当別に行ってきた事業を一体化させ、連携の取れる組織を構築することで人的財政的な効率化を図るとともに、地元のまちづくり団体や自治会、井路を管理する土地改良区など、既存の組織を組み込んだ新たな組織を構築し進めていく必要がある。